
百怪 都会の怪 19話

annmin

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

百怪 都会の怪1-9話

【Z-IPアード】

N4559M

【作者名】

ann-n

【あらすじ】

現代でも、人の集まる場所に妖はいるようです。

「お面」

知人の話。

都内のある印刷所で働いている彼は、生まれも育ちも東京の下町で、子供の頃はよく地元のお祭りに参加していた。

「10才くらいの頃だったから、今から20年くらい前ですかね」

近くの神社の境内は今でも緑を多く残していて、少し茂みに入ると、子供なら完全に隠れるくらいだという。

ある夏祭りの夜、両親に連れられて屋台を冷やかして歩いていると、ふと茂みの奥に光を見つけた。

目をこらして見ると、複数の大人が何やら話しているみたいだった。

「好奇心もあつたと思いますけど、その時は何でもいいから背伸びして、大人の仲間入りをしたがっていたんだと思います」

近付くと、案の定何かの儀式に備えたような見た事もない格好をした大人が複数いた。

「今考えると、山伏のよつな格好を
していたんじやないかと」

彼はその大人たちに遠慮無く、

“僕もそれ着たい！”

“僕もそれやりたい！”

と要求した。

大人たちは互いに顔を見合わせていた。
よく見ると、皆お祭りでよく見る鼻の高い
お面をしていた。

動作はどこか重く、ビデオのスロー画面を
見せられていくよつだつたといつ。

“これは……したが……”

“……祭り……ダメだ……”

“……帰そう……”

何を言つているのかよく聞こえなかつたが、
どうやら拒否された事だけはわかつた。
ふつ、と突然体が宙に浮いたかと思うと

「えつ？」

気がつくと、彼は社殿の屋根の上にいた。
その高さと突然の事態に怖くなると、大声で

泣き出した。

下は大騒ぎになつたといつ。

結局、はじめに使つて彼は救出された。

怒られるより、どうやって屋根に上つたのか
呆れられたという。

わけを話そうとしたが、なぜかその時は声が
どうせいつても出ず、仕方なく諦めた。

「次の日は普通に話せたんですけど、
“もつとマシな言い訳を考えろ”って
親父に怒られて」

それでも彼は、今でもそのお祭りを
毎年楽しみにしていると語った。

「拍手」

都内で小学校の教師をしている知人から
聞いた話。

彼は、昔は大道芸をしており、今でも何か
イベントがあると、無料で参加していると
いつ。

こちらの関わるとこりのボランティアにも
時折足を運んでくれる。

彼のパフォーマンスは、いわゆる「足長」
(スタイル)と呼ばれるもので、2~3
メートルのいわゆる竹馬の足場部分だけで
歩くような技。

それをタキシードなどで正装して、野外、あるいは会場内をねり歩くのだ。

まだ学生だった頃は、練習にも一苦労したと
いう。

住んでいたボロアパートなどで練習出来る
はずもなく、いつも近くにある竹林などで
彼はトレーニングを行っていた。

「今考えてみれば、もっていいの場所では
ありましたね」

足場に乗るには苦労するものの、手をかける
のに大量の竹が存在し、転ぶ心配をする必要
はなかつた。

ある日、日没まで練習していた彼は、ついに
どの竹にもつかまる事なく、竹林の中を歩き
きつた。

達成感を抑えきれず、思わずその場で彼は
“やつたーーー！”と叫んでしまつた。

「その時、拍手が聞こえたんです」

“どこから？”と聞くと上を指差し、“頭の
上から”と答えた。

見上げると、頭上のさらにもの方の竹の幹
から、それぞれ一本の手が伸びて、拍手を
繰り返していた。

「すぐに足場を降りて帰りました。

場所を貸してもらつて、祝福もしてくれたのに、失礼な話ですけどね」

その後、その竹林で練習をする事はしなくなつた。

ただ、今でもイベントなどに出る時は、そこにお酒を供えに行くそうだ。

「知らない人」

通つているお寺の近くにある、保育園の保母さんから聞いた話。

妖の怪24話の14『履物』でもお話を頂いた方である。

ある時、遊び道具の片付けをしていると、園児たちが来て『知らない人が来た』と言つてきた。

不審者なら危ないと思つて、すぐにその場所へ駆けつけると、砂場の前、そこに落ち葉が大量に集められていた。

「誰がやつたの?」

園児たちは首を左右にブンブン振り回しながら、口々にそこに知らない人がいた、と話した。

ちなみに、砂場から離れた場所に大きな栗の木はあるが、その落ち葉はいろいろな種類の葉が混じっていたそうだ。

「洞窟」

あるボランティアのバザーに参加して頂いた、主婦の方から聞いた話。

彼女の家は都内にあり、結構年季の入った家だつたそうで、狭いながら庭もあつた。

彼女がまだ小学校低学年くらいの頃の事。ある時、庭の中心に大きな穴が開いているのを見つけた。

中はどうやら垂直ではなく斜めに段差が付いているようで、不思議に思いつつもその中へと入つていったという。

奥に進むと、彼女より1つか2つ、年下と思われる少年がいた。

彼は驚いた表情で彼女を見ていたが、やがて口を開いた。

「お母さんが帰つてくる前に、帰つて」

昔風の着物を着ていた記憶があり、顔立ちも

「でも」「あたしの家だよ？」

そう言つと少年は泣きそつた顔になり、
いじめてしまつたと感じた彼女は慌てて
彼をなぐさめるために言つた。

「「「」。すぐに出ていくから」

来た道、といつても一本道でしかなく、
穴の外へ出た。
出ると、昼間に入つたはずなのに、空には
星が浮かんでいたという。

「あの後、こんな遅くまで「」に行つて
たんだつて両親に叱られて」

庭の穴の事を説明しようとしたが、その頃
には穴は影も形も無くなつていた。
その実家は、今でもそこにあるとの事だ。

「廊下」

「」で内職をしている知人から聞いた話。

内職と言つても、彼はそれしか仕事をして
いないので、それが本職のようなものなの

だが、その彼が住んでいたマンションで、妙な体験をしたといふ。

仕事が一段落ついて落ち着いた時、ずっと家の中にこもっていたので、散歩に行こうと玄関のドアを開けた。

開けた時に、視界に女の子が飛び込んできた。

まだ小学校に上がるか上がる前か、くらいの少女が、赤い和服にその身を包んで、廊下を踊るよみこじて飛び回っていた。

「こんな子、近所にいたかなあ

その少女は、何がそんなに楽しいのか、ずっと笑っていたという。

ただ不思議な事に声は聞こえなかつた。その笑顔を見ているうちに、急に眠気に襲われ、彼はまぶたを閉じた。

「気が付くと、病院のベッドの上でした

医者の話によると、彼は丸一日寝込んでいたそうだ。

運ばれた際、熱を測つたら39度以上もあり、当時流行していた伝染病を疑つたらしい。

熱はすぐに下がり、退院後、救急車を呼んで

くれた同じ階の住人がいると聞き、その人に
お礼を言いに行つた。

「オバサンでしたけどね。ただ、変な事を
言われて」

何でも、彼が倒れていたのを見つけた時、
背中や周囲に桜の花びらが散つていたと
いう。

「そのマンションは廊下まで屋内の造りに
なっているから、風で飛んでくる事は考え
にくいんだけど」

あの子は何がしたかつたんだろうか、そう
言って彼は不精ヒゲをなでた。

「リサーチ」

知人から聞いた、さらにその知人の話。

その人は新聞社に勤めていて、編集に関わる
都合上、終電や終バスで帰るのは、珍しい事
ではなかつた。

ある時、いつものように日付も変わつた
時刻に帰る事になつた。

乗り継ぎの最後のバスを待つていると、

停留所にそれが来て停車した。

「はて？」

そう思わず彼は声を上げた。

この時間帯のバスは普通、そんなに乗客はないはずだ。

しかし今日の前にあるバスには、乗客がぎつじりと詰まっている。

彼は数歩後退して、乗る意思の無い事を運転手に示した。

「……ダメか

小さく運転手がつぶやいたのを、彼の耳は逃さなかつた。

やがてそのバスが遠ざかるに連れて、今度は乗客が2、3人しか乗っていない、“いつも通り”のバスがやつてきたという。

「そいつは笑つていたよ。

“何者かは知らないがリサーチが

足りん！”って

10年ほど前の、神奈川県での話らしい。

「ミドリガメ」

とある大手に勤める〇〇の方から
聞いた話。

出勤後、給湯室で来客用の湯のみを
洗おうと、水道の蛇口をひねった。
すると、水流と共に何かがカラーンと
落ちてきた。

「……ミドリガメ？」

小さな甲羅がそこにはあった。
まさか蛇口から出てきたわけではない
だろうと見ていると、もぞもぞと手足
と思われる四肢が甲羅から出てきた。

「やけに細いな、と思つて見ていたん
ですけど」

それは小さな人形のような、細い手足を
生やすと、一本足で立ち上がった。
明らかに亀のそれではない頭を左右に
振ると、排水溝に向けて止まつた。

「後ろ、というか真上からしか見て
いなかつたので、それが人間の顔を
していたかどうかはわかりませんが

その排水溝には、ゴミ防止用のキャップが
取り付けられていたが、まるで体を溶かす
ようにして、鉄製のそれを無視して入つて

いつしました。

「何だつたんでしょうか、あれは」

後には強烈な生臭い匂いが残されたので、彼女は洗剤で流し場全体を洗うようにして必死にその匂いを消したといつ。

場所は、六本木の有名なオフィスビルだつたそうだ。

「仰向け」

お寺で修行する同僚から聞いた話。

以前、子供が木に登つたり、いろいろと危険な場所に上がろうとするのを、心配して相談に来た母親がいたといつ。

「子供つてそんなものだと思うんだけど

見つけ次第注意したり止めさせたりする、くらいしか対応は思いつかない。

とにかく常に気を配つている事ですね、とお茶を濁していた。

ところがある日、その母親から、子供が高っこころに登るを止めてくれたといつ

話を聞いた。

何かきつかけでも、と聞くとその母親は困ったような顔をして、彼に理由を話し始めた。

「子供から聞いたらしいんだが、何でも登る場所とか大体は決まっていたようで」

一番多いのは公園のトイレの上だった。近くに大きな木があり、その木を登つてトイレの屋上に上がっていたという。

トイレの屋上は四方が区切られていて、そこには段差があり、自然に降った雨で水が溜まっていた。
こういう場合、屋上に上がるのを止めるのだそうだが

「何か、木の上から屋上の水たまりを見ていたら、水中に魚が見えたらしい」

それはお腹を上にしており、最初は死んだ魚でも投げ込まれたかな？と思つていたそうだ。

しかし、その魚は身をくねらせて泳いでいる。
仰向けて泳いでいるそれを不思議に思つて見ていると、

「バシャツ、と水中から手が現れて」

それが水中に戻り、波紋が収まると魚も消えていた。

怖くなつた子供は急いで木から下りて、それ以来木に登つたりするのを止めているのだといふ。

「結果的には良かつたんじやないか？」

私が聞くと彼は首を左右に振つた。

「最初の3日だけで、それからは元通りになつたつて言つてた」

世の中、上手くいかないねえ、と彼はため息をつきつつ頭をかいだ。

「剥製」

ある大学院生の女性の方から聞いた話。

大学には当然の事ながら、学術において必要な標本やサンプルが保管されている。彼女はある時、生物学部の同僚から、資料を探すのを頼まれたといふ。

「手伝つてくれ、イコール力仕事なんですね。けどね。」

研究には男も女もありませんから

探しているうちに、彼女は動物の剥製を見つけた。

意図的ではなく、古いダンボールの箱を開けたら、偶然視界に入ってきたという。

タヌキの剥製だった。

しかし、どこか妙な違和感を感じた。

もつとよく見てみようとして、そのガラスのケースを持ち上げ、照明の下で目をこらす。

ガラスケースの上といわば横面といわば、模様のような跡が付いている。

一つの大きな円形に、4つの爪あと。

それらは全て、中から付けられているように見えたという。

短く声を上げると同時に、ガラスケースを落としてしまった。

「幸い、割れませんでしたけど、落とした音を聞いた同僚が駆けつけてきて」

ガラスケースをのぞくと、すでに足跡はどこにもなかつた。

「化かされたんですかねえ、私」

後で教授に話をしたが、よくある事ではないが、そう珍しい事でもないと言われた

そうだ。

「柿」

家と会社が近く、自転車通勤している
知人から聞いた話。

ある時ちよつとしたミスで残業が発生し、
終電が関係無い彼は一番遅くまで会社に
残つた。

作業が終わり、彼は帰宅する事にした。
会社から家まで約30分。

距離にして、一駅区間より少し長い程度。

「だから、考えられるのはその間にって
事なんんですけど……」

家に帰り、上着を脱いでハンガーにかける。
と、片側が妙に重く感じる。

見ると、左側のポケットがふくらんでいる。
何か入れたかな？ と手を入れると……

「柿が一個入つてました。

……もちろん入れた覚えなんてないし、
深夜2時過ぎだつたし」

別に欲しかったわけでもないが、かと言つて
そのまま捨てるのも気が引けた。

一応冷蔵庫に保管する事にしたが、食べる気にもなれず放置。

結局、痛んできた頃に捨てたといつ。

「昔は、ああいつのでも」と褒美になつたんですかねえ」

それから間もなく他の会社に転職した彼は、今は電車通勤となつてゐる。

「肉人」

「保育園の頃だから、20年ほど前の事になりますけど」

都内のある大手系列の「コーヒーショップ」に務めるその女性は、いわゆる“歴女”で、そのきっかけとなつた出来事を話してくれた。

彼女の通つていた保育園では、毎年夏になると肝だめしが行われた。
もちろん、先生や保護者グループと一緒にである。

肝試しと言つても、そのためにどこかへ電車で行くとかはなく、町の中の公園から公園へと渡り歩くだけ。

しかし、いつもは寝ている時間に起きている、というのが園児たちにはこの上ない刺激となっていた。

「その肝だめしイベントの時は、みんな
昼寝をいつもより取らされるんです。
時刻にしてみれば10時ちょっと過ぎ
程度ですが、園児にしてみれば未知の
時間ですからね」

外灯があるとはいって、うつそうと木々の
茂った公園を選んで歩くので、当時の
彼女にしてみれば充分怖かつたという。
最初の公園を出発し、次の公園に差し
掛かった時、それは現れた。

「何ていうか……全身真っ白な人が行き先の
公園からひょいって出てきて。
それで一瞬でまたひょいって引っ込んだん
ですけど」

それは某タイヤメーカーのキャラクターの
ように、たるんだような肉感があった。
彼女は引率の先生のスカートを引っ張り、

「何かいた！ 何かいた！」

え、何々？ どうしたの？ と聞いてくる
先生に、彼女は今見たものを説明した。

「ちょっと待つてて

すぐ後ろにいた男の先生が呼ばれ、さらには他の先生も次々と集まってきた。
同行していた保護者の数名も呼ばれ、何か話し合っていたが

「もうすぐ雨が降る、という事なので今日は肝だめしは終わりでーす」

そこでいきなり肝だめしは解散となり、保護者が同行している園児はそのまま親と一緒に、他の保護者は保育園待機だつたので、先生たちと一緒に保育園まで戻つた後に帰る事になつた。

後年、彼女のお母さんにその事を話すと、

「あの時保育園で待つていたらねえ、変質者が出た可能性があるからつて連絡が来てねえ」

しかし、彼女は納得しなかつた。
何か自分の見た物の記録は無いかと本や文献を読み漁り、やつとそれに該当する物を見つけたという。

「徳川家康が、二代目秀忠に將軍職を譲つた折、駿府に移ったんです。」

そこで……

全身肉の塊のよつな妖怪が出た、といつ話があるそつである。

またその肉を食べれば、武勇が増したのによく残念がられた、と書かれていたとか。

「でも、アレを間近に見たら食べてみたいとかは思いませんよ」

「若返るとか、美肌効果があるとか
だつたら?」

私の問いに彼女は考え込んでしまつた。
そして私もその後、近くで話を聞いていた
師匠に叱られた。

ちなみに、公園は都内にあり、遊具は
変わつたものの今もそこにあるといつ。

「ガード下

40代のグラフィックカーの方から聞いた話。

彼の住まいは都内で、小学校の頃に仲の良い
友達がいて、よくお互いの家を行き来して
遊んでいた。

ただ、道中ガード下のトンネルを通らねばならず、昼はともかく、暗くなつたそこを歩くのはとても嫌だつたといつ。

「距離にして10mも無いはずなんですね」

「けどね」

「ただ、子供の頃は無性に怖くつて」

ある日、また友人の家で遊んで遅くなつてしまつた彼は、トンネルの前で悩んでいた。抜け道なんてあるわけもないし……と思つて横を見ると、まだ舗装されていない地面の上に、石板を置いた道があつた。どうやらガード下をくぐらなくとも、向こうへ行けるようだ。

見上げると、外灯も両端にしっかりと立つている。

以来、暗くなるまで遊んだ時は、その道を通つて帰るようになつた。

時は流れ、大人になつた時に、彼はようやく矛盾に気付いた。

「いや、だつてねえ。

「どう考えたつてガード下くぐらなきゃ家に帰れないはずなんですよ。

それに、あの辺りでまだ土のままの道路なんて、もう無かつたはずですから」

思い出してみると、外灯も妙に古めかしいと
いうか、時代が違う感じがしたという。
調べてみると、昭和30年代の頃の外灯が、
一番記憶にピッタリ合つたそうだ。

「神隠し」

個人的な話だが、私は生まれた時は未熟児で
専用の新生児施設のお世話になった。
その施設の看護婦（今は看護師）から、母が
聞いた話。

ある時、比較的元気な新生児の部屋から、
子供が1人いなくなつた。

しかも、ベッドは高い柵で囲まれている。
そもそも1人でどこかへ行けるはずは無い。

「当然、最初に思い浮かんだのは“誘拐”
です。

でも、未熟児用の施設なので、医者と
スタッフは24時間待機体制ですから

良くも悪くも人の出入りが激しいので、
関係者の目を盗んで、というのは絶対
不可能。

施設内を全チェックし、それでも見つから
なければ警察に……

という話になつた時、彼女は室内の異常に

気付いた。

「同じ部屋の……他のベッドに寝ていた新生児がみんな起きて、ハイハイして柵に頭を押し付けていたんです」

その頭を押し付ける方向は皆一箇所を指していた。

そこには、緊急用の搬送ベッドがある。調べてみると、そのベッドと壁の間に行方不明になつた新生児が眠つていた。

「他の赤ちゃんたちが、いる場所を知つていたのも不思議なんですけど……結局、誰が赤ちゃんをベッドの裏に？ というのもわからずじまいでした」

今は場所を移転しているらしいが、その施設は現存している。

「文字」

都内に住む女性から聞いた話。

彼女は都心に近い企業に勤めており、その日は取引先に資料を持っていく用事で外出していた。

無事資料を届け、いざ帰ろうかという時

不意に雨が降り出した。

いわゆる夕立で、突然の事に驚いた彼女は近くに公園を見つけ、その公衆トイレで雨宿りする事にした。

最近は公衆トイレも昔と比べれば比較的綺麗で、問題は他に人がいないかという事だったが、幸いその時は無人。入り口前のスペースで、雨音を聞きながら彼女は一息ついた。

「でも、その時暗いなって思つたんです」

雨が降つていて以上、多少は暗くなるのが当たり前である。

しかし、その暗さとは何か異なる。

電気や自然光を無視したような、そんな感じを受けたという。

「そうしていいのちに、壁とか床とかに何かが浮き出でてきて」

それは、何とも形容し難かったという。アルファベットと、ナスカの地上絵を混ぜ合わせたような図形が次々と平面に浮き出でくる。

『うるさいやいけない！』

とつねにとつねに判断した彼女は、転がるよつね

トイレの外へと飛び出した。

すると、あれだけ降っていた雨は一滴も無く夕日がまぶしく田に入る。

振り返ると、一応公園の中ではあつたが、そこは茂みになつており、その中から飛び出でたような形になつていたという。

「後で思い返してみたら、入ったトイレって……本当にトイレかどうかもわかりませんけど、木造だったんですよ。

今時、そんなの都内の公園にあるのかな」

後日確認したところ、その公園のトイレはよくあるコンクリート製だったそうだ。

「玉」

「郵政民営化の頃だから、もう一〇年くらい
前だね」

IT関連に勤めている男性から聞いた話。
SEやプログラマーといった専門職ではなく
スケジュール管理をしていたという。

「下請けに一人か2人で派遣される、
まあ“お日付け役”だね。
大手と言わわれているところは、基本
開発能力無いからなあ」

とはいって、仕事はかなり忙しい。

“お日付け役”が派遣されるといひは、たいてい納期が遅れたりしている、いわゆる“修羅場”が多かつた。

「だから、おちおち休む事も出来ない。熱を出してフラフラになつても、必ず一度は現場に顔を出す。

丸一日いるといないとでは、緊張感が違うからね」

ある時、40度近い熱を出した彼は、いつたん現場に出向してから病院へ行こうと足を早めていた。

しかし、電車内の空氣と混雑に気分がさらりと悪化。

それでも何とか駅を出て大通りに来た時、一休み入れた。

現場のビルまで後もう何分も無い。とにかく顔さえ出せば……と顔を上げると、妙な物が見えた。

「何かね。何というんだろ？……
青っぽい物が、すごい速さで動いていたんだ」

よく見ると、それは球体の形をしていた。

運動会で使われる大玉転がしの玉を、一回り小さくしたような物。

それが道を行き交う人々の間を避け、あるいはぶつかりながら移動している。さながら、ピリヤードの玉のよう。

それから田を離せないでいると、その球体はいつの間にか自分の田前まで迫っていた。しかし熱のためか、精神も体もどこか反応がにぶい。

どうなるのかと見守つていると

「マズそだなあ、これは」

耳鳴りまで聞こえていた耳に、その声ははっきりと聞こえたといつ。

そう言い残すと、球体は横を通り過ぎていった。

振り返つたが、そこにはいつもの雜踏があるだけだったといつ。

「熱のための幻聴と幻覚だったと、自分ではそう思つてるんだけどね」

そんな物を見たのは、後にも先にもそれだけだつたけど、と彼は付け加えた。

「スイング」

都内にある病院に勤める、小児科の先生から聞いた話。

基本、子供は容態変化が激しく、すぐに熱を出したり体調を崩す。

1才違えば薬の量も変えなければならず、神経の休まるヒマは無いという。

「病院で一番儲けたければ、小児科と緊急指定を止めればいいって言われているくらいですから」

ある時、熱にうなされている子供がいた。解熱や投薬を試みるが、一向に下がる気配がない。

万が一の容態悪化に備えて、彼は医局に泊り込む事にした。

一晩明けると、容態は落ち着いていた。脈も正常に戻りつつあり、彼はホッと一息ついたという。

仮眠を取ろうと自室へ戻ろうとした彼を、一人の看護師が呼び止めた。

「何でしょうか、コレ」

そう言つて差し出したのは、オニヤンマと呼ばれる大きなトンボの死骸だった。

朝、検診のために子供の病室に入ると、

それがベッドの下に落ちていたらしく。

都内の病院で珍しいとも思ったが、何とも
答えようがなく、

“捨てなさい、そんなもの”

と言つて、彼は自室へと戻つた。

「その後、回復したその子から話を聞く
機会があつたんだけど」

聞くと、うなされている間、彼は夢を見ていたといつ。

何かがブンブンと自分の周りを飛び回つて
いて、怖くて動けないでいる夢だつた。

すると、彼の目の前にぬつと誰かが現れた。
高校球児のよう、白いユニフォームに身を
包み、手にはバットを持っていた。

ちょうど年齢もそのくらいに見えたといつ。
そしてバッターのように構えたかと思つと、
振りぬいた。

パン！ という音と共に、ブンブン飛び
回つていた何かの音も消えたといつ。

一緒に聞いていた両親のうち母親が、

「それ、お爺ちゃんかも」と言い出した。
と言つた。

何でも彼女の父親はすでに他界していたが、
六大学野球に出場したほどの打者であったと

いう。

「医者をやつて長いけど、やつぱり肉親の
救おうとする力もすこいと思いますね」

“何でユニークオーム姿だったんでしょう？”
そう問うと、

「可愛い孫に、一番格好良かつた時の姿を
見せたかったんじゃないの？」

そう彼は笑つて答えた。

「余計」

以前にも書いたかもしぬないが、私は
若い頃、短い間だが仏門関係で修行を
していた。

その修行仲間というか同門に、形容し難い
男がいた。

バカというか天然というか、どれくらいと
問われれば、かつて剣道の試合で、相手に
回し蹴りを食らわした級の、度し難いバカ
である。

さて、そんなバカでも一通り修行すれば、
“それなり”に、見える・感じるようにな
なつてくる。

いつもは山や修験地で異質な気配を確認するのだが、ある時家でその気配を察知したらしい。

その時の彼は気配を感じる事が出来るものの、対処方法など知らない。

こういう時は大人しく時間が過ぎるのが待つか、対処出来る人間に連絡を取るものだが、あいにくとそういう殊勝な心がけは持ち合わせていない人間だった。

「とにかく、呆れさせたら勝ちだと思つてさ」

PCを起動させ、保存してあるH口動画を大音量で流したといつ。しばらくすると気配は消えた。

「勝つたと思つた

ここまで聞いて私も呆れる他無かつたが、それも対処方法として有りなのか、と半ば感心していた。

しかし、事はそれでは済まなかつた。

「それから、妙な気配がする度に、H口動画で撃退していただんだよ。

そしたらさ」

ある時、寺にやつてきた彼を師がどがめた。

師は険しい表情をして彼を問い質した。

「何をした」

彼はそれまでしてきた事を話すと、

「とんでもないモン、連れて来てるやぞ」

その言葉に青くなつた彼は、すぐにお祓いを受けた。

水ごりをし、小一時間ほどでそれは終わつたといつ。

その後、彼は当然の如く師に散々叱られた。

「余計な事が、余計なものを招くのだ」

一体何が憑いていたのかを聞いたが、

「今のお前に話したら、喜んで取り込まれ
そうだから言わん」

としか言われなかつたといつ。

私もその後、聞く機会を得たが、やはり師は
答えてはくれなかつた。

死ぬ前には答えてやると言われているので、
聞くのを楽しみにしている。

「漢字」

「姉から聞いた話ですが」

そう話した彼の姉には、小学校低学年の娘がいた。

彼に取つては姪であり、夫と家族3人で実家からさほど離れていない所で暮らしていたといふ。

「家中で、姪が覚えたての漢字を落書きしまくつて困るつて」

それは“木”とか“口”とか簡単な物に限られていたが、家中に書きまくるので閉口していた。

“そんなに書きたいのなら、自分の手に書きなさい”と呆れながら注意したところ、“自分の手じゃなきゃダメ?”と返してきた。

「自分の手つてどういう事? つて聞いたら夜中に壁から手が出てくるので、それにも落書きしていたつて……」

“お父さんよりも大きな手”と言つてたのとかなりの大きさには違いない。
さらにその手は真っ赤だったといふ。

「さらに、書く字を要求していたみたいなんですよ。

“飲む物飲む物”とか“食べる食べる”つて言つてたと

難しい漢字はまだ書けないので、ひらがなで言われた事を書いた。

するとその手は壁の中へ引っ込み、しばらくすると落書きの消えた手がまた現れる、という事を繰り返したといつ。

心配した姉は、知り合いのお寺に娘を連れて相談に行つた。

対応したお坊さんは、

“あまり良くないものです”
と言い、対処する方法を教えてくれた。

その夜、例の手がまた出現した。
姉は、お坊さんに言われた通りに字を書いた。

『火』

手が壁に引っ込んだ後、“ぐきやぎやわ”と悲鳴が聞こえた。

それ以来、“手”は現れなくなつたといつ。

今は引っ越しているが、品川の大井町沿線の借家であつた出来事だそうだ。

「公園」

都内にある、区が管理する大きな公園。
そこの施設管理をしている人から聞いた話。

管理施設なので、年中無休というわけではなく、また24時間入れるところでもない。きちんと定休日があり、また定刻になると門は閉ざされてしまう。

「大きな池があつたり、川の流れも再現している公園だからね。」

普通の公園とは違つて、メンテナンスも必要だから」

夜にもなると、警備のためにパトロールで公園内を巡回する。

緑も多いので、日が暮れるとその暗さはいつそう際立つてくる。

「外灯はあるんだけどさ、土の地面に木製の橋とか歩いていると、昔の人間つて夜はこういう道歩いていたんだな、とか思つて」

もつ高齢の彼は、10年前からしているその仕事に不満はなかった。

困るのは、たまに若い職員が派遣されてくる

事だという。

「大学出のヤツとか来るんだけど。

“それはそういうものだ”と納得する事が出来ないんだ。

やれ、夜中に遊具で子供が遊んでいる、人口河川に誰か侵入しているとか」

セキリュティシステムには反応しているのだが、行ってみると何も無い。

その度に彼は若い職員に、“アレは子鬼が遊んでいるだけだ”、“アレは小豆洗いが出たんだ”と説明するのだが、どうしても納得しないのだという。

「若いモンの方が頭が固いってのはどうかと思つよ」

彼は、ああいうモノは都会でもどこでもいるのだろうが、おそらく水の流れとか備えている場所でないと、住みづらいのではないか、と付加えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4559m/>

百怪 都会の怪 19話

2010年10月16日12時04分発行